

# 膳所高校昭和50年卒業生・卒業45周年記念同窓会

## 同窓会記

日時：2022年4月2日（土）12：30～

場所：琵琶湖ホテル 瑠璃の間

### 1. はじめに

陽春の候、桜も満開間近の琵琶湖畔、琵琶湖ホテル瑠璃の間において、恩師お二人を含む総勢84名の参加者のもと、還暦同窓会以来、実に5年振りの同窓会はついに開催を迎えました。思わず「ついに」としたためたのには、この同窓会の開催に対する万感の思いがあったからです。

私たち昭和50年卒業生の「卒業45周年記念同窓会」は、2020年に開催される予定だったにもかかわらず、開催まで2年の空白がありました。新型コロナウイルスによるパンデミックは3年目を迎え、その間、私たちの同窓会は2度の延期を強いられました。今回の開催に向けても、幹事の中でも意見は様々で、決して安易な状況や気持ちで開催に漕ぎ着けた訳ではなかったのです。

このあたりの経緯は、代表幹事3組の姜永根くんの文章にしたためられています。

## 2. 同窓会のはじまり

こんな思いの中で、12時30分、司会 7組の大橋昌平くん、4組の小林初子さんによる開会宣言が高らかに発せられたとき、胸に熱いものがこみ上げたのは、私だけではなかったと思います。いつもの開会宣言より、いっそう厳粛かつ重厚な瞬間であったように思いました。

同窓会の進行と感染対策についての細かい注意をあげてくれる大橋くんの慎重な言葉選びが、この同窓会は今までとは違うものであることを説いているようで、身の引き締まる思いがしました。

## 3. 実行委員長のあいさつ

そんな思いをさらに強めたのは、同窓会実行委員長 3組の白川正大くんの開会の挨拶でした。白川くんの挨拶の中には、今回の同窓会の開催がいかに困難を極めたか、また、その中で押して開催するには、会場の琵琶湖ホテルはじめ、幹事の皆さんの感染対策や開催に向けての努力と、こんな時でも仲間に会いたいと願う参加者の皆さんの熱い思いがあったからであることが語られました。

その中でも、私の胸を打ったシーンは、ここに集いたくても集うことのできなかつた多くの仲間の事を語ってくれたときでした。今回は感染対策は万全とは

いえ何らかの不安を抱え、あるいは仕事上の規制を受け、参加したくても参加できなかった多くの仲間がいました。準備を一緒に進め、尽力してくれた幹事の中にも、本番に参加できなかった仲間もいました。

そして何より、前回の還暦同窓会には参加してくれた仲間の中に、この5年の間に、あるいはコロナのために再三延期している間に、命を落とした仲間、体調を崩して会場まで来られなくなった仲間がいました。

卒業以来47年、会いたくてももう二度と会えない仲間は年を重ねるごとに増えつつあります。そうした仲間の存在を語るとき、あの白川くんが、繰り返しますが、あの白川くんが、胸を詰まらせ、声を震わせ、涙をこらえて粛々と言葉をつないだのです。白川くんが大切にしている心情「一期一会」、まさに今回の会に相応しい心のこもった挨拶でした。

#### 4. 恩師の先生方のあいさつ

そして、今回思い切ってやって良かったと思えた出来事は、さらに続きます。

1組担任の奥克彦先生、3組担任の嶋寺洋基先生のお二人の恩師が壇上に上がられ、おのおのの一言を頂いたときです。

奥克彦先生は今年85歳になられたそうですが、姿勢もよく、声にも張りがあり、とてもそのようなお年になられたとは思えないお元気さでした。世の中の状況を踏まえ、今回の参加を迷われたそうですが、私たちと会うことを優先する決断をしてくださったことに、心打たれた同窓生も多くいました。先生はこの40数年、国内外のあらゆる地域、国々、あらゆる山々に行かれ、多くの体験をされたそうです。

ヒマラヤの登頂にも成功され、今シーズンもスキーに行かれたと聞いて「おー」という感嘆の声が上がりました。いくつになっても前向きに挑戦し、探究心を持つことの大切さを伝えてくださると同時に、私たち戦争を知らない世代の人間が大半を占め、今の時代をリードしていることの恐ろしさも、今進行している戦争に重ねて伝えてくださいました。

墨で真っ黒に塗りつぶした教科書の思い出は、自分の母の思い出話と重なり、改めて直接聞いたことを伝えるべき自分たち世代の責任を痛感しました。

嶋寺洋基先生は、前回お会いしたときよりもかなりお痩せになっていました。ご自身が激やせされた経緯を詳しくお話しくださり、先生とはそう年齢の違わ

ない私たちが、これから歩いていくであろう老いへの覚悟を説いてくださいました。高齢になってから始められたピアノでマスターされた曲数に驚き、新しいことに挑戦することで老いに立ち向かう姿勢を示唆して下さったように思われました。

還暦を過ぎ、私たち世代に教えを説いてくださる人がめっきり少なくなった今日この頃ですが、先生方のお話はこれから人生の終焉に向かう私たちに、大切なことを教えてくださるものでした。先生方は、おいくつになられてもずっと私たちの先生でいてくださるんだと実感しました。

先生方のお話の後、これまでに亡くなられた恩師の先生方、同窓生の皆さんに黙祷を捧げました。いつにもまして、先生方がそばにいて見守ってくださり、友人たちが横にいて微笑んでいるような不思議な感覚を覚えました。

## 5. 乾杯と歓談

いよいよ、開会行事の締めとして、1組の城久恵さんの乾杯の音頭によって歓談が始まりました。

今回はひとテーブル6人以下、隣同士の間には大きなアクリル板が設置され、一人ずつの和食コース料理で、話すときにはマスク着用、食べるときには黙食、できる限り立ち歩かずと制限の多い会食になりました。

そのため、短時間の歓談中にすべての出席者を把握する機会も少なく、それを残念に感じてくれる同窓生もいました。しかし、だからといってルールから逸脱し、無謀な行動に出る人は見受けられず、参加者の多大な協力により、秩序のある静かな会食が実現しました。

## 6. 同窓生の講演

歓談の時間を借りて、世の中でがんばっている同窓生のプチ講演会が行われました。

一人目は、地域で写真事務所を営みながら、滋賀の魅力を写真や書物で伝える活動を続け、発信されている1組の辻村耕司くんの「近江学」から、「近江の祭礼とその周辺」という題名の講演でした。

勇壮な火祭りをはじめとして、長年のきめ細かい取材の賜というべきいくつか

の大祭、奇祭が大きなスクリーンで紹介され、祭りにかけた地域の強い思いや郷土愛などを丁寧に伝えてくださり、滋賀で生まれ滋賀で育った私たちでさえ初めて知ることも多く、たいへん興味深い講演でした。

二人目は、昨年、野洲市議会議員に当選し、地方行政に携わることとなった7組の奥山文市郎さんに、「地方行政にかける思い」を講演してもらいました。長年公務員として、地方行政を陰で支える仕事を続けてきた奥山くんならではの、地方行政を動かす立場での思いを熱く語ってくれました。

二人の講演は、それぞれが歩んできたこれまでの人生を物語るたいへん貴重な話でした。ただ、参加者の語らいの場が十分でなかったことや、何十年来、初めて参加した参加者がいて、もっと話したいと思っていた人も多かつたらしく、講演の最中も少なからず話し声が行き交い、講演者の二人にはたいへん申し訳ないことをしたなあと、スタッフのひとりとして反省するばかりです。

参加者の中からも、講演と歓談の時間をしっかりと分け、講演をしっかりと聴き歓談の時間も十分取ってほしかったという意見も多く聞かれました。準備に時間を割き、リハーサルも十分してもらった講演者の二人には心から感謝します。

## 7. 記念品の贈呈

プチ講演会のあとは先生方への記念品の贈呈。記念品は唐橋焼きのペアカップで、うちひとつは、唐橋焼きには珍しい、人気のピンクのカップを特別に焼いて頂いたものでした。先生への記念品贈呈を最後に第1部は終了しました。

## 8. 第2部・ビンゴゲームとじゃんけんゲーム

第2部は、本来の計画では二次会で行う予定だったビンゴゲームとじゃんけんゲームを、1組の奥野晃弘さんと3組の私、木野智子、4組の瀧田聡くん、3組の村山昌子さんの企画組4人で仕切りました。コロナ禍の同窓会・・・あれもだめ、これもだめと制限を設けてきたことも多かったので、少しでも笑顔で帰ってほしいという願いを込めて精一杯盛り上げました。

ビンゴゲームの景品は、他府県から帰ってきてくれた同窓生に滋賀を懐かしんでもらおうと、できるだけ滋賀県の名産品を探し回りました。全員には行き渡らなかったけれども、喜んでくれた同窓生が少しでもいたならうれしいです。

第1部の厳粛なムードとは違って、全体的に和やかムードになったよという意見がありました。ただ、できればこのようなゲームの時間をフリートークの時



間にあてて、二次会のない分、たくさんの友達と語り合いたかったという意見も少なからずあって、なるほどなぁと考えさせられました。

1, 2年生で同じクラスだった仲間や班活動で一緒だった仲間とも、いつもなら二次会やそのあとの宿泊、次の日の日帰り旅行などで交わる機会があるのですが、今回はそういう時間ありません。せっかく遠方から帰ってきてくれた同窓会に、仲間と語り合う時間が十分提供できなかった事を考えると、フリートークの時間をもっと増やしてほしいという意見はもっともだなぁと納得しました。

ただ、感染対策に神経質になるあまり、できるだけ人が行き来しない、自席から立ち歩かないためには、ゲームをやるという発想しかなかったという、いわば苦肉の策であったことだけは言い訳させてください。

コロナ禍で行う同窓会のあり方として、どちらも一長一短あったのかもしれないと思う反面、今回、数十年振りに参加してくれた同窓生にとっては、語らいの場というのはそれほどまで重要なものなのだと考え及ぶゆとりをもう少し持つべきだったと、(これは私見ですが)、振り返ったりします。

## 9. 校歌斉唱

締めくくりは、恒例の〔校歌〕と〔琵琶湖周航の歌〕を斉唱しました。マスクとソーシャルディスタンスの斉唱は初めてですが、2組の北川和夫くんの力強いエールのあと、8組の林重樹くんのギター、4組の小林初子さんのクラリネットの生演奏に、徳島にある大学への赴任前々日に、このときのために正装し、演奏を動画で自撮りしてラインで送ってくれた9組の上田泰史くんのマンドリンがコラボ。

同窓会の締め斉唱にはあまりにも贅沢な時が流れました。動画の映像と二人の生演奏がぴたっと合ったときには、鳥肌が立つほどの感動でした。我が母校の校歌や、慣れ親しんだ〔琵琶湖周航の歌〕を、「ほんと、いい歌だったんだなー」としみじみと感ずることができました。

## 10. 閉会のあいさつ

閉会宣言は、奇跡の60代、我らがサモンこと3組の村山昌子さん。今回の同窓会の企画委員のひとりとして、準備を積みながらも2度の延期に阻まれ、様々な意見の中で、最後まで開催をとともに悩み、苦しんできた仲間のひとりです。

それだけに、参加してくれた仲間が「来て良かった、参加して良かった」と言ってくれた言葉に感動し、また、無念な気持ちで参加を見合わせた仲間にも思いをはせて、でもやって良かったとその場にいた誰もが感じた気持ちを代弁してくれる、今回の同窓会の閉会に相応しい優しいスピーチでした。

## 1 1. 同窓会に対する思い

私自身、今回ほど同窓会のあり方について考えたことはありませんでした。コロナ禍にあって、反対意見も多数あった中で行った同窓会が、世の中の批判の対象になることも十分考えられました。一枚岩でスクラム組んでやってきたと思っていた幹事会の中も、ぎくしゃくする場面に遭遇することが多くなりました。私自身何が正解なのか答えは今もわかりません。

でも、同窓会当日、参加してくださった先生方のお顔や同窓生の姿を目の当たりにして、間違いなく言えることがあります。それは「本当に会えて良かった、話せて良かった」ことです。人との交わりを避け家に閉じこもり、自分の生活に厳しく制限を設け、ひたすら耐えてきた2年あまりの緊張の日々を、この日、懐かしい先生方や仲間との再会が癒やしてくれた事はまぎれもない事実です。

明日のことはわからない今だからこそ、この同窓会での懐かしい出会いは、いつにもましてかけがえのない再会ではなかったかと、参加してくれた多くの仲間から寄せられた感想を読んでいて感じた次第です。

## 12. さいごに

「この難局の中、開催に漕ぎ着けて下さった実行委員長をはじめ幹事の皆さん、ありがとうございました。今回延期になれば、次に繋ぐことが難しくなったと思われます。この開催が良かったと皆で喜べるよう、ここ数日は皆さんお身体大切にね。会えて良かったです。3年後、必ずまた会いましょうね。」と語ってくれた同窓生の言葉が心に残る、母校の「卒業45周年記念同窓会」でした。

文責 3組木野(藤井)智子